

齋藤秀一が思い描いたローマ字運動の夢

Joseph Essertier

齋藤秀一（さいとうひでかつ）という歴史的人物

齋藤は1908（明治41）年12月24日、山形県東田川郡山添村（現・鶴岡市）の泉流寺に長男として生まれた。1931（昭和6年）に駒澤大学・文学部・東洋文学科を卒業し、朝日村大泉小学校の代用教員になったが、軍国主義教育に批判的であったこと、また生徒や村の青年達にローマ字を教え、ローマ字会を結成したために「赤化教員」と疑われ、鶴岡警察署に検挙された。検挙が理由で翌年に学校を解職となる。彼の検挙理由について、当時の地方新聞の論調は日によって変わったが、解職された5日後の『荘内日報』には、「吉村鶴岡署長は極秘に付し語らざるも、同村にはローマ字研究会なるものありて会員五十余名を有し、齋藤は同研究会よりローマ字機関誌なるガリ版の雑誌を発行しているもので、今回の事件の内容は、殆ど問題にならぬものらしく、単に齋藤秀一、塚田正義は常に文化闘争の研究に耽溺しつつあるに過ぎず、具体的運動の形跡は更に認められないと云うので、泰山鳴動の感あるものと見られている」と書かれた¹。なお、塚田正義は同事件で解雇処分になった教員である。

最初の検挙（1932年9月13日）の時は5日後に釈放されたが、その後も何度か逮捕され、最後は治安維持法違反の疑いで山形県特高警察によって1938年11月に検挙された。『特高月報』1939年（昭和14年）4月分をまとめた『昭和特高弾圧史1—知識人に対する弾圧』の中の秀一についての記述によると、特高警察は秀一を「国語国字ローマ字運動」の「中心人物」とみなしていた²。「検討したる結果、妙に合法を擬装せる共産主義運動の一翼たるの容疑濃厚となりたるを以て、客年11月12日齋藤を検挙し厳重取調べたる処本名を中心とする言語運動はマルクス主義言語理論に立脚せる、所謂無産階級解放運動の一翼たるの任務を持つプロレタリア文化運動の一分野としての国語国字のローマ字運動なること判明せり。」と秀一の活動を共産主義の活動と疑っている³。（「客年」とは1938年のことである。）このような理由で検挙され、裁決を待

つ間に結核にかかり、1940年9月5日に31歳で亡くなった⁴。

齋藤秀一の執筆活動を一言で言うのは難しいが、主なものをリストアップするならば、方言研究、1930年代の帝国日本の言語政策への批判、中国の文字改革運動の紹介、国字のローマ字化の主張、国際語としてエスペラント使用の主張が挙げられる。

秀一が編集した『東京方言集』（編集兼発行齋藤秀一、1935年。復刊、国書刊行会1976年）と魯迅、葉籟士他の著で齋藤秀一が訳した『支那語ローマ字化の理論』（1936年、文字と言語社）を含めて、資料の大部分が鶴岡市立図書館に所蔵されている。

英語圏における日本と中国のローマ字運動を評価した研究史

英語圏では日本のローマ字運動に興味を持っている人が多い。戦後最初に有名になった研究は Robert King Hall, *Education for a New Japan* (New Haven: Yale University Press, 1949)である。当時は日本について、戦争中の狂ったような軍国主義や非民主主義的要素、近代化ができない国という悪いイメージがあり、そのような「近代化がうまくいかなかった」日本の言語問題に英語圏の人たちは関心を持ったようである。「なぜ日本人と中国人はそんなに難しい文字を使うのだろうか？」とはよくある質問であるが、J. マーシャル・アンガーは戦後のローマ字教育実験について *Literacy and Script Reform in Occupation Japan: Reading between the Lines* (1996年)の中で書いた⁵。「封建主義」とまでは言っていないが、言葉の問題では日本が非近代的なところがあると強調している。アンガーはローマ字の方が、簡単、便利、覚えやすいと見て英語圏のオリエンタリズムや、漢字に関する西洋の神話、中国と日本の保守的な文字思想を批判する⁶。

戦後の占領政策の中で、マッカーサーのGHQはローマ字教育を日本人に強制させようとしていたという話がよくあるが、アンガーは *Literacy and Script Reform in Occupation Japan* で否定している。日本国内では昔から文字に関する論争が行われていたのであって、「欧化主義」対「伝統」という単純なものではなかったと彼は述べている。「文化」と「機械」のどちらを優先するか、すなわち、便利な音声文字（カナとローマ字）やリテラシー（読み書き能力）と、

エリートの文化や漢文漢語アジアの文化の保護と、どちらが大切かという問題であって、外圧ではない日本の複雑な問題であると説明している。アンガーより以前に中国のローマ字運動について研究したのは、デフランシスである⁷。彼は階級闘争として見てるといっても過言ではないだろう。

私が初めて秀一を知ったのは、アンガーの本である。ローマ字を主張しただけで左翼運動家として疑われて検挙されるのかと驚いた。音声文字を欧化主義と捉えて、素晴らしい伝統的な漢字文化を捨ててはいけなくと考える人があるのは理解できるが、ローマ字を危険視する見方があるとは予想外だった。本論文では1930年代の政治的社会的状況におけるローマ字運動の「危険性」を強調し、秀一の思想が社会改革、社会変化と繋がっていったかもしれない可能性を強調したい。

秀一の思想

秀一の思想を深く研究した小林司は次のように書いている。秀一がローマ字とエスペラントについてどのように考えていたかが良くまとめられている。

「ローマ字運動の最も大きな目的は、知識の獲得および発表をたやすくして、これを普及することである。今のような漢字かな混り文を使う限り、それを十分に習い覚える暇と金とを持たない民衆は知識を持つことができず、知識は社会の一部である支配階級に独占される。国内でローマ字が果たす役割を、国際的にはエスペラントがになうことになる。言語もまた、生産手段の一つとして人間によって作られ、人間によって発達させられて来たことを考えれば、言語を我々の要求にかなうように改良・改革して行くことの可能性も認められる。エスペラントがあらゆる反対や無関心をのり超えて、これだけ広まったことは、言語の意識的・人工的な創造の可能性を実地に証明したものである。」⁸

この「国内でローマ字が果たす役割を、国際的にはエスペラントがになう」という考えこそ、秀一の思想の特徴だと私は考えている。本論文ではそれを彼の「ビジョン」と呼ぶことにしよう。

換言すればビジョンは、国内民主主義のためには広く知識を普及させることが重要であり、その役割を担うのがローマ字である。また、国際的な民衆主義や平和のためには、一部の国々の人々に独占されない言語が必要であり、それ

がエスペラントである、ということである。

私が秀一を研究対象にしたいと考えたのは、秀一のビジョンの珍しさからではない。1930年代の軍国主義という暗い時代にもかかわらず、命をかけて闘い続けた熱心なローマ字運動家、そして才能豊かな研究者がいたことに驚いたからである。しかしながら、秀一人が熱心なローマ字運動家だったのではなく、政府に厳しく弾圧されても、研究や活動を続ける人がいた事はローマ字運動とエスペラント運動が盛んだった事を示している。

日本のエスペラント運動が1920年代、30年代前半に非常に盛んであったと強調する研究が、二つ、最近刊行されている。ショウ・コニシの *Anarchist Modernity: Cooperatism and Japanese-Russian Relations in Modern Japan* (アナーキストの近代：協力主義と近代日本の日露関係) という本と、イアン・ラプリーの *Green Star Japan: Internationalism and Language in the Japanese Esperanto Movement* (緑の星の日本：日本エスペラント運動の国際主義と言語), 1906-1944 という博士論文である⁹。ラプリーの論文は、1930年代前半のエスペラント運動について、運動の活発な側面を詳細に描いている¹⁰。秀一のような進歩的なエスペラント運動が弾圧されたことがマスメディアなどで広く知られていたのも、一般社会の人々の間でエスペラント=社会主義という間違ったイメージが強かった。その中でエスペランティストたちは、エスペラントは政治的に中立的な言語であるとイメージを訂正したがっていた。警察を意識していたというよりも、むしろ一般社会を意識していたとラプリーは述べている¹¹。彼の研究によると、1930年代前半にエスペランティストたちはイメージを改善する問題に取り組んだが、進歩的なエスペラント運動が弾圧された後の30年代の半ば以後も活動を終えることなく、政治的な活動を避けつつも、活発的な運動が続いたという。社会主義のエスペランティストたちが1930年代後半に検挙されたことにより、社会主義的なエスペラント運動は1937年ごろに終わってしまったが、その後もなお、宝木寛というエスペランティストと秀一が最後までプロレタリア文化運動を続けた¹²。宝木は秀一と同様に投獄され、獄中で結核にかかり、若い歳で亡くなった。

ローマ字運動の活発化

秀一は山形県の田舎に住みながらも、他の国々のローマ字運動について調べたことを日本人に伝え、また、国内外の学者や文人らと交流を持ち、彼らの論文などを紹介し、方言研究もしていた¹³。地理的に不利な場所にありながら、広いネットワークを作ることができたのである¹⁴。学術雑誌をいくつか編集したが、その雑誌に載せる原稿を集めるためもあって、知識人たちと交流した。以下に列举すると、物理学者の田中館愛橘（1856年~1952年）、作家と反体制活動家の高倉テル（1891年~1986年）、言語学者でエスペラント学者の大島義夫（1905年~1992年）、中国の魯迅（1891年~1936年）、中国のローマ字運動家でエスペランティストの葉籟士（1911年~1994年）、国語教育学者の平井昌夫（1908年~1996年）、翻訳家の石賀修（1910年~1994年）、国語教育学者の石黒修（1899年~1980年）、方言研究の東条繰（1884年~1966年）である¹⁵。彼らはみな今も広く知られている。他にも影響力のある研究者や文人らと交流したが、これら9人のほとんどは、秀一が編集した雑誌に少なくとも一回は投稿していた。特に『文字と言語』は学術雑誌として最も重要な雑誌であり、編集に尽力したようである¹⁶。4年間にわたって第13号まで「方言研究、ローマ字運動、エスペラント運動、世界の言語改革運動などに関する諸論考を掲載」した¹⁷。彼の郷里には彼を忘れていない人が多くおり、一番最近の記事では「戦争に立ち向かった」人として記憶されている¹⁸。

清水康行は秀一の研究成果を1992年に『国文学：解釈と鑑賞』の中で紹介している。清水氏は秀一のビジョンの意義について、「ローマ字化による民衆への文字言語・知識の解放というテーゼは、齋藤に限らず、文字改革論者の多くが主張するところである。しかし、それを、日本国内の問題に限らず、世界、特に東洋の民衆言語の解放との連帯において捉え、かつ、当時の国粋主義的・帝国主義的言語政策に対する明確な批判にまで高めたのは、齋藤を措いて、多くはない」と述べている¹⁹。

秀一は日本の民衆と日本語使用者の知識獲得力と発表力を伸ばすために研究したばかりではなく、興味深いことに、ローマ字が日本語の発展とエスペラントの発展を繋げる可能性を指摘している。すなわち、「日本語を大衆化するために、ローマ字は大きな役割をつとめるが、エスペラントはどんな役に立つのか。それは弁証法的言語理論の紹介、エスペラント創造の際の経験を提供、

という二点で、日本語の大衆化に役立つ」と書いている²⁰。だれにとっても、ローマ字で日本語が手に入りやすくなり、エスペラントは同じローマ字を使用して国際語の経験を提供してくれる。

次の文では、彼の言語帝国主義への抵抗戦略が表現されている。「また植民地（朝鮮・台湾・満州）の言語的解放も必要であり、日本語をおしつけるのではなく、植民地の民族言語を自由に発展させるためにそれをローマ字化する運動をすすめて、植民地と日本のコミュニケーションにはエスペラントを使うべきだ」と²¹。朝鮮・台湾・満州のそれぞれの言語をローマ字で書けばいいと彼は勧めている。たとえば日本とコリアの人々が話す時には、どちらのものでもない中立的な言葉であるエスペラントを使えばいいというのである。会話でも書面でもエスペラントを使用するコミュニケーションが彼の考えだった。

「民族言語を自由に発展させる」というゴールはローマ字で達せられるというビジョンについて、「支那の新しいローマ字運動」という論文の中でさらに明確に説明している。その論文の冒頭には「支那の新しいローマ字運動の目的は何であるか？ 下瀬氏はこれを落としている。支那は「文字の国だ」というが、最近の政府の統計によっても国民の80%以上は文盲である。魯迅氏は嘗て「支那には全く文字がないに等しい。」といったが、我々はこの言葉を頷かないわけには行かない。この文盲の大衆に文字を獲得させて、その文化水準を引上げ、以て支那民族の解放を早めるのが、即ち今の新しいローマ字運動、いはゆるラテン化運動の最も大きな目的」だとある²²。日本人も中国の人々も、同じくローマ字で解放される。漢字で教育を受けても解放が不可能ではないかもしれないが、ローマ字使用という文字改革によって解放のプロセスを早めようとしている。秀一のビジョンの新鮮さを感じることでできる提言である。現在の日本では、ローマ字運動とエスペラント運動の歴史があまり知られていない。そのために新鮮と感ずるのだろうか。1930年代でも、もっと新鮮だったのではないだろうか。

秀一のローマ字教育論

論文「支那の新しいローマ字運動」は1936年に発表されたが、その5年前（1931年6月）、23歳のとき、山形県の田舎の小学校で代用教員として教え始めた直後に論文「ローマ字と小学校教育」は書かれ、『山形県教育』という雑

誌に発表された。そこでは、日本の小学生にローマ字を教えよう、ローマ字教育が必要だと主張している²³。

日本人は「読書なき国民」だと『山形県教育』に投稿した者がいたらしい。秀一はそれに対して以下のように述べた。日本人があまり読書しない原因として、「我々が読書をなし得ないような教育を」受けているためではないかと彼は答える。日本のこどもと同じくらのレベルの教育を、欧米とロシアの子どもの方がずっと早く終了するという²⁴。秀一は、「その最大な原因は国字の怖るべき欠陥にあるのだ。この欠陥は日本式ローマ字の国字としての採用のみに依って救い得られる。(略)ローマ字論が過激論でもなければ、危険な思想でもないことを明らかにし」ローマ字教育と小学校教育とがどんな関係があるか論及するという。

さらに、文字の数が多問題について述べている。漢字は何万字も存在しているが、6年間の義務教育でその中の1360字を覚えることになっており、知識階級の人でも5、6千の漢字をあやつるに過ぎない。5年間から10年間「漢字学習に脳力を捧げても漢字まじり文、即ち国字を完全に読み得ない運命」になる²⁵。イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシアの小学生は小学一年生の時に文字の全てを覚えらるのに、多数の漢字があるために日本人は一生勉強しても全部覚えられない。これらの国々と比べて日本人の読書能力が劣り、教育において彼らにおくれるのは当然だと。加えて漢字には呉音、漢音、唐音など、複数の読み方があり、正確に読めないことが多い。例えば「後」という字にはノチ・アト・ゴ・ウシロ・シリ・シリへの6通りも読み方がある。

読めても書けない字も多い。他人に聞いたり辞書で調べたりして「貴重な時間を実生活には殆ど役に立たないことに費さなければならない」。一人の人間が一度に聞いたり調べたりする時間はわずかのようだが、「これが一生と積もり、更に全日本人について見ることになれば莫大な損失となる。実際我々が毎日使うような言葉、ヒネル、ツネル、タタク、ナグル、マサグルなどを直ちに間違ひなく漢字で書き得る人は多くない」だろうと。

そして20世紀の「機械文明」には漢字が合わないと説明する。「漢字は機械にかからない文字である」²⁶。「外国ではタイプライターに依って簡単な書類は短時間に明確に作成されるに関わらず、我々々々手先で書かなければならない。邦文タイプライターでは値段が高くなるのみならず、ローマ字タイプの約五倍の時間を要することとなる。漢字では電報もうてない、アドレソグラフや

テレタイプの如き便利な機械も使えない」。

「かかる国字の欠点を如何にして改良するか？ それには国字としての漢字をやめること、他の文字を国字に採用することが必要だ」。この場合、日本の文字の選択肢として、現在まで使用された文字にする道と、使用されたことのない「全然新しい文字の採用」にする道とがあるだろう。後者の場合は「新国字論」であり、「これは全く誰も知らない文字であるから、文字の最大要素たる背景を持たない、国際的でない」ということになる。そこで「カナにもローマ字にも劣ることが明らかである」。

カナかローマ字かの、どちらかがいいことになる。どちらがよいだろうか。カナ論の強みは「日本人なら誰でもカナを知っている」ことである。しかし、ローマ字は他のすべての点においてカナにまさると秀一は考える。「その上日本式ローマ字は十九字で足りるからたとえ大文字と小文字を併せてもカナよりは字数の少ない点に強味がある」。

彼は「日本語の廃止」や「文化の中断」を主張しているわけではない。「急激な改良を欲しない」と説明する²⁷。おそらく、ローマ字運動への弾圧を意識しているのだろう、「言語と文字と別物」である、「日本語を健全な国語にまで発達させたい」、「我々はローマ字の国字としての採用を主張する」と、漢字カナ交じり文を止めても日本語を止めないと、誤解されないように念を押している。前年（1930年）に「文部省に臨時ローマ字調査会が設けられた」ことを根拠として挙げて、ローマ字には明るい未来が開けていることを示し、「小学校のローマ字採用はもはや時の問題でしかないの」だと書いていた。「理解ある教育者ならば、正科としては困難があれば、休暇に講習会を開催するもよし、放課後の時間を利用するもよし、校長なり、同僚なりの同意を得て児童にローマ字を教えてやることは是非共必要であろう」と山形県小学校の先生たちを誘っている。日本語で使うローマ字の19字を20時間があれば教えられると強調して筆を置いている。

秀一は4月に教員になってすぐに、以上の記事「ローマ字と小学校教育」を県教育界で権威のある雑誌に発表し、5月2日には「国字改良とローマ字について」という講演を行い、同じ5月中に17名の児童に週3時間ローマ字を教え始めた。最初からローマ字教育について熱心であったようである²⁸。教育実践の経験としても、山形県の田舎の小学校で教えるようになったことによって、ローマ字の方が漢字カナ交じり文よりどれくらい早く獲得できるか、文化水準

がどれくらい高まるかについて、考える刺激を受けただろう。その小学校の高等科児童は「一、二年合わせて男三八八、女一五人であった。だから、高等科にすすめる男の子は約四人に一人であり、女にいたっては一〇人に一人もいなかった。一二、三歳になれば、立派な労働力として仕事のなかに組み込まれていた」という。それくらい進学率の低い山間部の土地で、彼は大学卒業後に教員をしていたのである²⁹。秀一自身もその近くの地域で育ったから、日本のリテラシーの問題を理論ばかりではなく自分の目で見、ローマ字教育の実践と良さについて考えさせられたことだろう。

マーシャル・アンガーは、日本では新聞を読むに十分な読み書き能力を持っていない人が 1945 年ごろも、その前の時代も、少なくなかったことを強調している³⁰。確かに日本は江戸時代から、他の国々に比べてリテラシー（識字力）が広がりを持っていた。それにもかかわらず、明治期以後でも日本の教育者が一人一人の生徒に高いレベルの読み書き能力を実際に与えたとはいえないという意見を彼は述べている³¹。1945 年以降の識字率がずっとよくなったのは、日本の生活の水準の改善、物質的な豊かさなどの、他の原因によると議論している。もし「リテラシー」の定義を UNESCO による「コミュニティーに参加できる」くらいの力と定義したとしても、新聞が読めるほどの力と定義したとしても、そのような高いレベルのリテラシー（英語で high literacy や full literacy）という定義によるならば、最近の研究者は、江戸時代から昭和初期までの日本には漢字の知識が充分でなく困っている人が多くいたと認めている³²。

日本の明治から昭和初期までの期間に、読み書きに困っていた人が多く存在していたことについて考えることは、当時の教育者を批判するためではなく、秀一などのローマ字、エスペラントの主張者の思想を理解するためである。かつて日本に社会政治文化に参加することが不可能な人が多くいたことを鑑みれば、ローマ字教育を進めていた秀一たちは、日本のみならず、世界においての文化的豊かさの可能性を高めることに関わる重要な仕事をしたことになる。秀一や 1930 年代のローマ字とエスペラント運動を再評価する必要があるかもしれない。

危険なローマ字運動

秀一の「ビジョン」の裏には、もう一つの危険なアイデアがあった。それは魯迅の言語文字改革についての思想であった：「魯迅は、民衆の解放のためには、人間生活のもっとも根本的なことばの改革を通して行われるべきであると考えていた。魯迅のいう文字改良運動は、たんなる注音字母（中国のふりがなのようなもの）や漢字そのもののローマ字化ではなく、民衆が日常つかう口語のラテン化でなければならないという主張だった。それは、まさしく秀一の言語理論とびたり一致するものであった」と秀一の伝記を書いた佐藤治助は指摘している。³³

しかし、「びたり一致」しているかどうかについては、まだ今後検証する必要があるが、やはり魯迅と秀一の言語理論は非常に近いのではないだろうか。例えば「生きている人の口から出た、生命力溢れることばと表現を紙に写しなさい」という魯迅のことばと清水康行がしるした秀一の思想に関する「活動の基本にあるのは、文字改革・言語改革を通しての、民衆への知識・思想の解放という考え方である。（方言研究も、民衆の生きた言語の把握の試みという点で、それに連なる位置付けを持っていただろう）」という彼の考察を鑑みれば、魯迅と秀一の思想の近さを私も感じる。³⁴ 秀一は魯迅と同じ夢を見ていたのではないか。

清水の表現「生きた言語」とは魯迅の「生命力溢れることば」と同じ意味だろう。秀一の方言研究も彼のビジョンと夢とが繋がっていただろう。当時（テレビのない時代に）秀一が教えた小学生は、おそらくいわゆる「標準語」（＝共通語、国語）で十分にコミュニケーションできなかった小学生がいたはずである。もしかしたら、秀一と魯迅は効率的に知識の獲得と表現力を身に付ける教育プロセスとして、小学教育を地元のことばとローマ字で受け、それから「標準語」をローマ字で習い、またローマ字で国際語エスペラントを習う、という共通の近代的教育の夢を持っていたのではないだろうか。

魯迅と秀一の思想は近代的でありながらも国家主義、言語帝国主義、中央主義、「国体」などに抵抗する思想でもあった。だれでもすぐ覚えられる文字を主張し言語の多様性を認めながらも、いくつかのタイプのヒエラルキー（縦構造権力関係）に支障をきたし、特高警察が危惧した国体の「変革」にもつなが

ただろう。治安維持法の第一条は「国体ヲ変革スルコトヲ目的トシテ結社ヲ組織シタル者又ハ結社ノ役員其ノ他指導者タル任務ニ従事シタルモノハ死刑又ハ無期若ハ…」³⁵で始まる。治安維持法で検挙された秀一は国体を変革する意図があったかどうかを別として、もし彼のビジョンを実施した場合、日本の国体が変わったに違いない。そういう意味で危険な思想を持っていたといえる。

ローマ字と小学教育³⁶

本誌五月号に於て鈴木氏が我が日本人が「読書なき国民」であることを指摘なさいましたが、この事実は我々に多くの問題を提出しているものではあるまいか？日本人が読書をしないという原因は多々あるであろうが、その最大なるものは我々が読書をなし得ないような教育を受けている為ではないか？新聞をただ読むだけにイタリアの子供は、尋常一年を終えただけでよいのに、日本人は高等二年を終えなければならないという。我々が汗水たらして小学校六年間かかって覚えた知識をヨーロッパ、アメリカの子供は尋常四年終了で我が物にするという。こういう事例を挙げて来れば限りのないことであるが、以上の例だけでも「読書なき」理由、進んでは教育一般の振はない原因がほぼどの辺にあるか大体の推察はつこう。

即ち説明を後にして結論だけを先に掲げればその最大な原因は国字の怖るべき欠陥にあるのだ。この欠陥は日本式ローマ字の国字としての採用のみに依って救い得られる。ローマ字論は相当世間に理解せられて来たのは嬉しいが、まだ誤解している方、全く知らない方もなくはない。国字改良の完成が教育家、殊に初等教育に携わる人々の好意ある理解に待つことの多いのを思えば、我々の任務もいよいよ重且大であることを覚える。誤解といえ、或大学の学監は私がローマ字論者なるが故に教育者として不適當なりと放言されたし、ローマ字に対して亡国論だとかいって恐怖の態度を示された方さえも少数はあったのであるが、私は決してそういう心配のいらぬこと、ローマ字論が過激論でもなければ、危険な思想でもないことを明かにし、出来ればこれと小学教育とが如何なる関係にあるかにも言及しよう。

ローマ字論は現在の日本の国字の厳密なる批判に始まる。国字とはある国民が普通一般に用いる文字で、日本の国字は漢字、カナ及びローマ字である。漢字とカナは混用されて、漢字カナ混り文を構成しているが、漢字カナ混り文中特に重要な地位にあるのが漢字であることは誰もが異議があるまい。

漢字はその数が非常に多く、五万及至八万と称せられているから、全部を学び尽すことは一生かかっても出来ない。義務教育六年かかって教える文字が一三六〇字、相当教育のある知識階級の人でも五千乃至六千の漢字をあやつるに

過ぎない。従って五年も十年も、否一生漢字学習に脳力を捧げて漢字まじり文、即ち国字を完全に読み得ない運命を荷なはせられているのが日本人である。これにくらべてイギリスは二十六字、フランスは二十五文字、ドイツが二十四文字、イタリヤが二十一文字、ロシヤが少々多くて三十二文字で国語を自由に読み書き出来、子供は一年生に入学した当時僅かの期間だけ文字を習えば、それから後は實際生活に役立つ学科その他に総ての時間を総ての能力を費やし得ると、学校の門をくぐり始めてから卒業迄、否一生の間文字の習得に苦しまなければならぬ日本人と比較する時、我々が読書能力に於て彼等に劣り、教育に於て彼等におくれるのは蓋し当然ではないか？

更に漢字一字に我国に於ては呉音、漢音、唐音、宗音等の数種の音と幾種かの訓があるのが普通であるから、一応は発音し得ても正確には読み得ない場合が多い。この点だけでは同じ漢字でも読み方の一字について唯一種しかない支那の漢字が遥かにまさっているわけだ。例えば、三種の神器の「神器」の読み方はジンキ・ジンギ・シンキ・シンギのいずれが正しいか？我々個人の問題ならば意味が分ればよいとしても、児童により加減な読み方を教えて、それで教育者の責任が果たせたといえようか？今朝日新聞に出ているレマルクの「その後に来るもの」に十二通りの読み方があるというのは嘘のような本当の話である。先ず「後」にはノチ・アト・ゴ・ウシロ・シリ・シリエの六通り「来る」にはクルとキタルの二通り、これらの組み合わせを作れば疑いもなく十二通りの読み方がある、而もどれが一体正確なのやらまるで見当がつかない。地名、人名になると更に無理な読み方をさせるものが多い。「長萬部」がオシャマンベだったり、濱口雄幸がハマグチ・オサチだったりする。

書く方には読む方以上の困難がある。即ち、読むだけは読めても書けない字が甚だ多い。いきおい他人にきいたり、字引きを引いたりして貴重な時間を実生活には殆んど役に立たないことに費やさなければならない。一人の人が一度だけ漢字を他人にきいたり、字引きを引いたりした時間は些細なものでもあろうが、これが一生と積もり、更に全日本人について見ることになれば莫大な損失となる。実際、我々が毎日使うような言葉、ヒネル・ツネル・タタク・ナグル・マサグルなどを直ちに間違いなく漢字で書き得る人は多くないであろう。

二十世紀を特徴づけるものは機械文明の発達であるが、漢字は機械にかからない文字である。印刷界にはライノタイプの広汎なる利用あるに関わらず、我が国ではやれ文選、やれ植字と何万、何十万という活字を一々手先の作業で処

理しなければならない。外国ではタイプライターに依って簡単な書類は短時間に明確に作成されるに関わらず、我々は一々手先で書かなければならない。邦文タイプライターでは値段が高くなるのみならず、ローマ字タイプの約五倍の時間を要することとなる。漢字では電報もうてない、アドレソグラフやテレタイプの如き便利な機械も使えない。こういう文字関係の便利な機械は将来も益々出来るに相違ないが、我々が漢字を使う限りに於て、我々は永久に文字機械文明からの落伍者たるをまぬかれぬ。

かかる国字の欠点を如何にして改良するか？それには国字としての漢字をやめること、他の文字を国字に採用することが必要だ。他の文字といえ、第一現在迄使用された文字の採用と、第二に使用されたことのない全然新しい文字の採用との二大方法が存在し得る。

第二の方法を主張する議論が所謂新国字論であつて相当熱心に主張された方もあるが、これはまったく誰も知らない文字であるから、文字の最大要素たる背景を持たない、国際的でない、形の上に於て不統一であり、音節文字であるが為拗音・促音の表現が不完全であり、要するにカナにもローマ字にも劣ることが明らかである。

第一の方法をとるものにカナ国字論とローマ字国字論とがある。カナ論ではひらがなを縦に右から書いて、一語々々を離すひらがな論と、カタカナを左横書きにして、やはり一語々々離そうと主張する横書きカタカナ論とが最も主なものである。カナ論の強味は日本人なら誰でもカナを知っている所にあるのであるが、一方各文字が独立する傾向が多分にあるので、カナばかりの文章はカナの豆まいたように読みづらく文字を構成する線の方向が不統一なことと、続け書きが許されないこととの為甚だ書きづらく、又国際法にかけ、拗音・促音の表現が不完全な所に致命的な欠陥を含んでいる。

最後にローマ字は現在これを知っている日本人の数がカナより少ないという所に弱味があるとはいえ、他の総ての点に於てカナにまさり、その上日本式ローマ字は十九字で足りるからたとえ大文字と小文字を併せてもカナよりは字数の少ない点に強味がある。

国字の改良ということで特に注意を願いたいのは言語と文字とは別物だということである。我々はローマ字の国字としての採用を主張する。しかし日本語の廃止などを主張するものでは決してない。否生硬な和製漢語とバタ臭い洋語とに痛ましくも傷つけられた日本語を健全な国語にまで発達させたいが為

の国字改良論である、ローマ字論である。

更に我々は急激な改良を欲しない。文化の中断を恐れるからである。改良は文語から口語への如く徐々に差支えない。といっても、世間でローマ字を使うようになったら自分もそれにならおうという追従主義であってはならない。日記からでもよい、手紙からでもよい、あらゆる可能な分野から国字改良ののろしを上げる必要がある。

去年の十二月以来文部省に臨時ローマ字調査会が設けられた。当面の問題は国語の「國語ノローマ字綴り方ヲ調査ス」にあるとはいえ、文部省のこの積極的な態度はローマ字を小学校へ入れんとしていることを明瞭に示唆している。小学校のローマ字採用はもはや時の問題でしかないのである。そうである以上理解ある教育者ならば、正科としては困難があれば、休暇に講習会を開催するもよし、放課後の時間を利用するもよし、校長なり同僚なりの同意を得て児童にローマ字を教えることは是非共必要であろう。小学校の児童に一通り読み書きが出来る程度にローマ字を教えるには、ローマ字仲間の実地の経験に依れば僅か二十時間足らずである。これだけの努力ならば何人もたやすく払い得るではないか！

¹ 佐藤治助『吹雪く野づらに：エスペランティスト斎藤秀一の生涯』鶴岡書店、1997年7月、173p.

² 明石博隆、松浦総三編『昭和特高弾圧史1—知識人に対する弾圧』太平出版社、1975-1976年、pp.209-210。元のテキストは『特高月報』1939年（昭和14年）4月分 pp.7-22である。同じ4月分の pp.59-60 も秀一関係である。『特高月報』1939年（昭和14年）9月分、p.4 も秀一関係である。

³ 『昭和特高弾圧史1—知識人に対する弾圧』 p.210

⁴ J. Marshall Unger, *Literacy and Script Reform in Occupation Japan: Reading between the Lines*, Oxford University Press, 1996, pp.24-43

⁵ J. Marshall Unger, *Literacy and Script Reform in Occupation Japan: Reading between the Lines*, Oxford University Press, 1996。日本語訳もある：J. マーシャル・アンガー『占領下日本の表記改革：忘れられたローマ字による教育実験』奥村睦世訳、三元社、2001年11月

⁶ J. Marshall Unger, *Ideogram: Chinese Characters and the Myth of Disembodied Meaning* University of Hawai'i Press, 2004 も似ている議論である。

⁷ John DeFrancis, *The Chinese Language: Fact and Fantasy*, U of Hawai'i Press, 1986

- 8 朝比賀昇、萩原洋子『エスペラント運動の展望』, 世界文化研究会, 1978年, p.126。朝比賀昇=小林司(朝比賀昇はペンネームである)。小林司「言語差別と闘った先駆的エスペランチスト斎藤秀一」『朝日ジャーナル』1978年12月15日にも小林司は同じ秀一の考えについて触れている。清水康行は小林司(=朝比賀昇)が引用した文より、また引用している:「斎藤秀一」『国文学: 解釈と鑑賞』57巻1号(1992年1月) p.102。
- 9 Sho Konishi, *Anarchist Modernity: Cooperatism and Japanese-Russian Relations in Modern Japan*, Harvard University Asia Center, 2013, Harvard East Asian Monographs 356 Ian Rapley, *Green Star Japan: Internationalism and Language in the Japanese Esperanto Movement, 1906-1944*, Oxford University DPhil Thesis, 2013
- 10 Rapley, *Green Star Japan: Internationalism and Language in the Japanese Esperanto Movement, 1906-1944*, pp. 214-229
- 11 Rapley, *Green Star Japan: Internationalism and Language in the Japanese Esperanto Movement, 1906-1944*, p.224
- 12 Rapley, *Green Star Japan: Internationalism and Language in the Japanese Esperanto Movement, 1906-1944*, pp.211-212。宝木寛の伝記がある: 宝木実『レジスタンスの青春: 人民戦線運動と宝木寛の生涯と』大阪市, 日本機関紙出版センター, 1984年
- 13 方言についての一番手に入れやすい文献は斎藤秀一『東京方言集』復刊、国書刊行会 1976年である。元の本は1935年に出版された:『東京方言集』編集兼発行斎藤秀一, 1935年
- 14 柴田巖、後藤齊編『日本エスペラント運動人名事典』ひつじ書房, 2013年, pp.218~219と大島義夫、宮本正男『反体制エスペラント運動史』三省堂, 1974年, pp.218-221を参照されたい。
- 15 『日本エスペラント運動人名事典』 pp.218~219, p.226, pp.233-234。佐藤治助『吹雪く野づらに: エスペランティスト斎藤秀一の生涯』 pp.248-252
- 16 『文字と言語』の記事の内容については佐藤治助『吹雪く野づらに: エスペランティスト斎藤秀一の生涯』 pp.225-230と大原蚩「[斎藤秀一] 非戦、世界平和への希求」『やまがた再発見1』山形新聞社, 2014年7月, p.51を参照されたい。
- 17 清水康行「斎藤秀一」『国文学: 解釈と鑑賞』1992年1月号, pp.98-104。『文字と言語』についてはこの「斎藤秀一」という論文のp.100を参照されたい。大島(=高木弘)や高倉テル、石賀修、石黒修、東条操の名は載り、魯迅などの論文が訳されている。
- 18 成澤宗男「たった一人で戦争に立ち向かった「エスペラントの星」」『週刊金曜日』1050号(2015年7月31日) pp.24-25
- 19 清水康行「斎藤秀一」 p.103
- 20 清水康行「斎藤秀一」 p.102
- 21 清水康行「斎藤秀一」 pp.102-103
- 22 「支那の新しいローマ字運動」『言語問題』2巻8号(1936年8月) p.381。下瀬氏はだれを指しているかまだ調べる必要がある。
- 23 斎藤秀一「ローマ字と小学教育」『山形県教育』山形県教育界、第493号(1931年6月1日) pp.26-29

-
- 24 斎藤秀一「ローマ字と小学教育」 p.26
- 25 斎藤秀一「ローマ字と小学教育」 p.27
- 26 斎藤秀一「ローマ字と小学教育」 p.28
- 27 斎藤秀一「ローマ字と小学教育」 p.29
- 28 佐藤治助『吹雪く野づらに：エスペ란ティスト斎藤秀一の生涯』 p.322
- 29 佐藤治助『吹雪く野づらに：エスペ란ティスト斎藤秀一の生涯』 p.110。明治時代の東北では、女子が一人もいない学校があったという。男女教育のギャップは秀一の時代にもあった。Kimi Hara and Kumiko Fujimura-Fanselow, “Educational Challenges Past and Present,” Ch. 5, Kumiko Fujimura-Fanselow, ed., *Transforming Japan: How Feminism and Diversity Are Making a Difference* (Feminist Press, 2011) p.74。貧しい子どもだけではなく、外国人、被差別部落、障害者などがローマ字習得の容易さにより救われたのではないかと考えられる。
- 30 Unger, *Literacy and Script Reform in Occupation Japan: Reading between the Lines*, pp.24-43
- 31 Unger, *Literacy and Script Reform in Occupation Japan: Reading between the Lines*, p.28
- 32 例えば英語では Richard Rubinger, *Popular Literacy in Early Modern Japan* (University of Hawai'i Press, 2007); Richard Torrance, “Literacy and Literature in Osaka, 1890–1940,” *Journal of Japanese Studies*, vol. 31, no. 1 (2005); Tessa Carroll, *Language Planning and Language Change in Japan* (Curzon Press, 2001) pp.114-115; Richard Torrance, “Literacy and Modern Literature in the Izumo Region, 1880-1930,” *Journal of Japanese Studies* 22.2 (Summer 1996); Jiri V. Neustupny, “Literacy and Minorities: Divergent Perceptions,” in Flourian Coulmas (ed.), *Linguistic Minorities and Literacy: Language Policy Issues in Developing Countries* (Mouton, 1984)。日本語の最近の研究を読んでいないが、その基本的なスタンスで議論する研究が以下にある：梅棹忠夫，小川了編著『ことばの比較文明学』福武書店，1990年；徳川宗賢「日本人のリテラシー：明治14年の〈識字調〉から」『国語学』第158集（1989年9月30日）；山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局，1981年。再版された平井昌夫『国語国字問題の歴史』安田敏朗編，三元社，1998年は古いが、漢字の問題と階級不平等について研究した貴重な本である。
- 33 佐藤治助『吹雪く野づらに：エスペ란ティスト斎藤秀一の生涯』 pp.248-249
- 34 “From the lips of living people...take words and phrases that are full of life and transfer them to paper.” John DeFrancis, *The Chinese Language: Fact and Fantasy*, p.249。清水康行「斎藤秀一」 p.102
- 35 宝木実『レジスタンスの青春』 p.117
- 36 私の論文で何度も引用した、齋藤秀一が山形県教育に投稿した「ローマ字と小学教育」を読みやすくするために旧字を新字にしてある。元の文は齋藤秀一「ローマ字と小学教育」『山形県教育』山形県教育界、第493号（1931年6月1日） pp.26-29にある。

庄内地域史研究所の三原容子氏、津山工業高等専門学校のかどやひでのり氏、別府良考氏に日本語の修正、そしてアドバイスして頂き、感謝しております。

秀一の生家の泉流寺は、曹洞宗の寺院で、秀一は曹洞宗の僧籍を有していた。秀一師の僧名は、シュウイチ、戒名は大雲秀一高和尚である。反戦僧侶としての事跡は、次の論稿に載っている。別府良孝「十五年戦争期の反戦僧侶一斎藤秀一師などの事跡」『東海印度学仏教学会誌』2016年, 191～202頁